

鉄道・電気事業からみた近代宇治の都市イメージ形成*

The image of the Uji City built by the infrastructure under the modernization

田中尚人**・川崎雅史***・坪田 樹****

by Naoto TANAKA, Masashi KAWASAKI and Tatsuki TSUBOTA

本研究では、1951年（昭和26）の大合併による宇治市誕生以前の久世郡宇治町を対象地域とした。この地域は近世以前から名所と茶業で賑わい、近代期には鉄道・電気事業などの都市基盤整備が実施され、宇治の都市イメージの中核をなす地域であった。本研究の目的は、近代期のインフラストラクチャー整備が、都市景観や都市生活に与えた影響を分析し、近代化のプロセスにおける宇治の都市計画思想、都市経営戦略を明らかにすることである。近代化過程における宇治では、鉄道・電気事業といったインフラストラクチャー整備が宇治の都市イメージを一新させたのではなく、インフラストラクチャーの力が巧みに活かされ、都市イメージの構成要素を近代に適合するように変型させ、近世に形成された宇治の都市イメージの継承に寄与した。

1. 序論

(1) 研究の目的

本研究は、明治から大正期にかけて実施された鉄道敷設や電気事業などのインフラストラクチャー整備が、都市や人々の都市生活に与えた影響を分析することにより、近代化プロセスにおいて、近代都市宇治がどのように形づくられたのか、また都市イメージを形成したのかを明らかにし、今後のインフラストラクチャー整備に活かすことを目的とする。

(2) 研究対象地と手法

本研究では、1951年（昭和26）の久世郡宇治町、横島村、小倉村、大久保村と宇治郡東宇治町の大合併による宇治市誕生以前の久世郡宇治町を対象とした（図-1）。この地域では、近世以前から名所遊覧と茶業で賑わい、明治・大正期には鉄道敷設や電気事業などのインフラストラクチャー整備が実施された。本研究では特に、この宇治を都市として特徴づけてきた名所と茶に焦点を当て、宇治の近代化について歴史的資料、文献（主要参考文献を文末に掲示）、ヒアリング調査、現地踏査を行った。

2. 宇治の都市イメージ形成

本章では、近世宇治において形成された都市イメージを絵図や史料を用いて明らかにした。

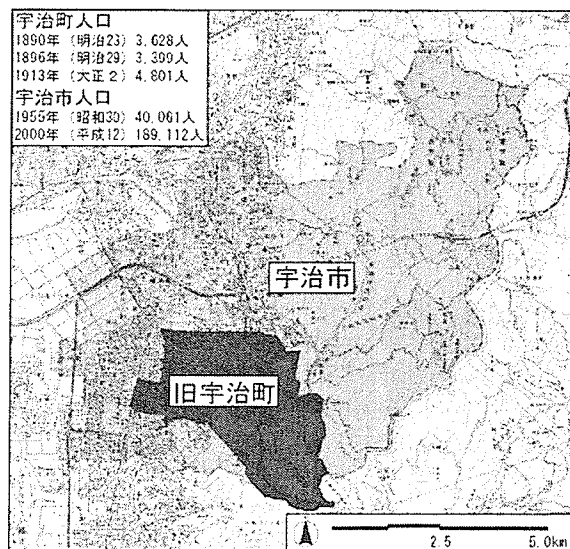


図-1 研究対象地宇治
（『宇治市史4—近代の歴史と景観』を参考に筆者作成）



図-2 近世の宇治の都市イメージ（『宇治名所図会』に加筆）

* Keywords : 都市イメージ, 近代化, 鉄道・電気事業

** 正会員 博士（工）岐阜大学工学部社会基盤工学科
〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 : naotot@cc.gifu-u.ac.jp

*** 正会員 博士（工）京都大学大学院工学研究科

**** 学生員 修士（工）京都大学大学院工学研究科

(1) 宇治の名所

古代より和歌に詠まれた宇治川を中心とする山河の美は、近世には名所図や名所案内などのメディアによって広く人々に紹介され、宇治の名を全国に知らしめた。そこに描かれた山河の美や寺社が創り出す風雅は、宇治の都市イメージの基盤として存在していた。

(2) 茶所宇治

宇治茶師が編み出した、宇治独特の覆下栽培によって質・量共に日本随一の茶産地となった宇治は、茶師である上林家が世襲代官に任命され、ひたすら茶栽培に努める特異な地域となった。明治維新という社会の激動期においても茶の品質を守り、茶所という都市イメージは確固たるものとなったと言える。

(3) 近世宇治の都市イメージ

- ① 宇治川を中心とする山河の美と、平等院などの寺社が創り出す神秘的な世界
- ② あらゆるものが茶と結びつき、優良茶を生産する茶一色の世界

これら2つが近世宇治の都市イメージを支えた重要な要素であったことが分かった（図-2 参照）。

3. 鉄道敷設による都市イメージの近代化

近代を代表するインフラストラクチャーである鉄道が、近世以来宇治の都市イメージを形成してきた名所と茶に与えた影響を分析した。

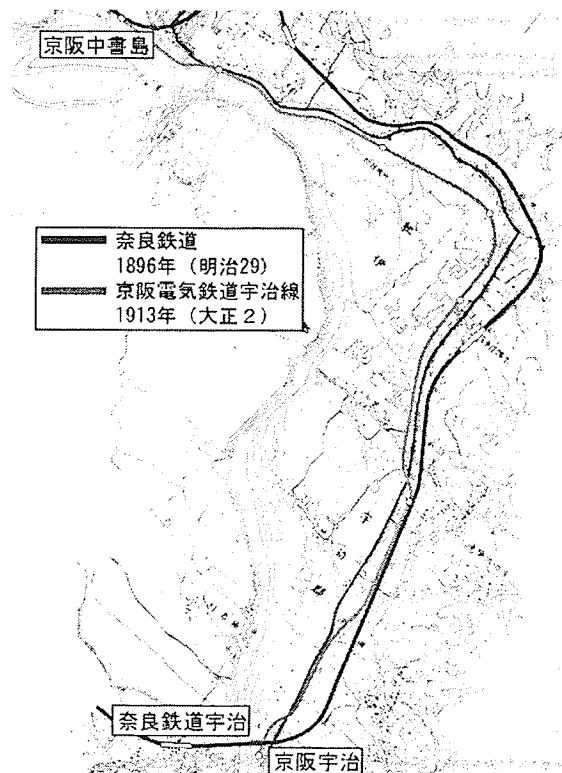


図-3 宇治における鉄道敷設
（「京都府庁文書」に筆者加筆）

(1) 宇治における鉄道敷設

宇治には、1896年（明治29）奈良鉄道（現 JR 奈良線）、1913年（大正2）京阪電気鉄道宇治線の2つの鉄道が敷設され、京都と接続された（図-3）。奈良鉄道は都市間交通、京阪宇治線は比較的駅間隔が狭い郊外型交通という性格の違いが指摘された。

(2) 名所遊覧の近代化

鉄道の路線選定や駅設置に際して、近世以来宇治の都市イメージの重要な要素となっていた宇治川を中心とする山河の美が意識されていた。

奈良鉄道の宇治川を渡る鉄橋は、宇治橋と平行に架けられ、宇治橋から見る宇治川上流の景観を鉄道の車窓から眺められるよう工夫されていた（図-4）。

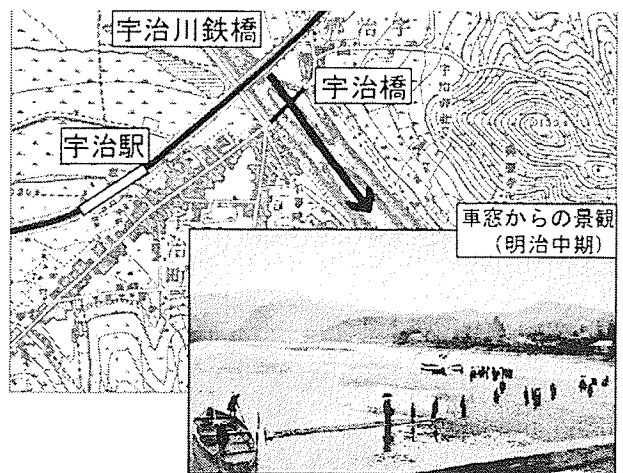


図-4 奈良鉄道と宇治の景観（1897年発行地形図「宇治」に筆者加筆、写真は『写真集成京都百年パノラマ館』より）

京阪宇治駅は宇治橋東詰に設置され、駅を出れば宇治橋と通園茶屋が目に入り、その向こうには宇治川が流れていた（図-5）。また、駅舎は鳳凰堂を擬して建築された。

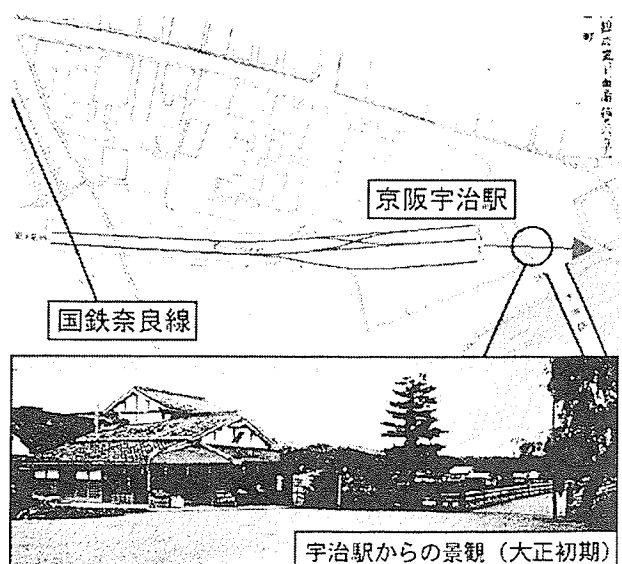


図-5 京阪宇治駅の設置と宇治橋東詰の景観（地図は「京都府庁文書」に筆者加筆、写真は『京都府久世郡写真帖』より）

近代化の象徴とも言える鉄道の車窓や駅から、近世宇治を代表する景観を眺めることができたのである。

鉄道敷設以後、遊覧列車の運行や公園整備、遊覧道路の建設などが行われ（図-6）、蛍狩や鶴飼など近世以来の宇治川を中心とする自然を活かしたイベントも開催されるようになった。鉄道による時間距離の短縮と名所遊覧のイベント化によって、宇治は京都・大阪から日帰りできる手軽な観光地となった。

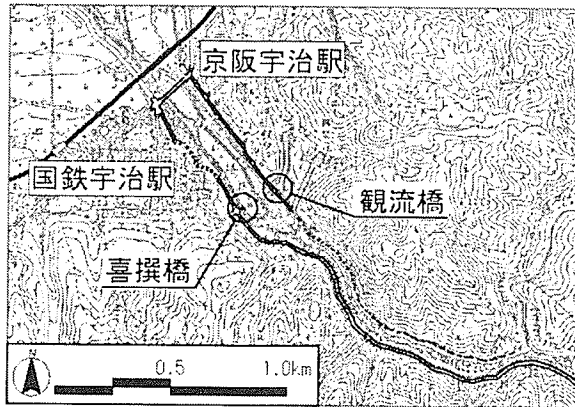


図-6 回遊式遊覧道路の建設
（1925年発行地形図「宇治」に筆者加筆）

（3）宇治茶の広がりや宇治の都市イメージ

1892年（明治25）小包郵便法が施行された。鉄道を利用した郵便システムであり、急速に広まった。間もなく小包を利用した宇治茶の通信販売が開始された。前年まで減少傾向にあった京都府の製茶産額が増加に転じたのは、通信販売の効果の現れと考えられる（図-7）。

1899年（明治32）の奈良鉄道各駅での小包郵便の取扱量を比較すると、宇治駅での取扱量、特に差出が非常に

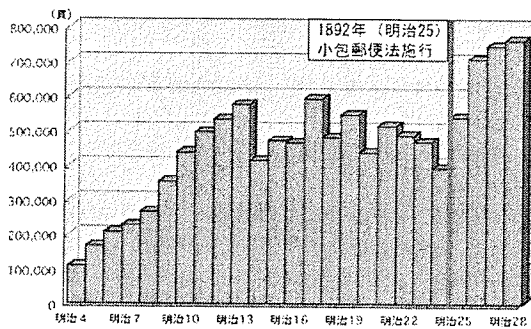


図-7 京都府製茶産額累年比較（『京都府著名物産調』より）

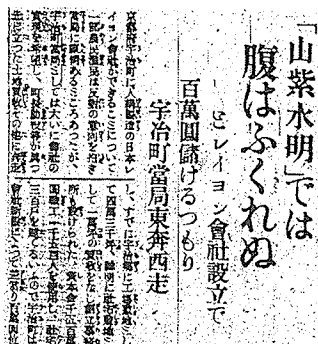


図-8 当時の世相（『大阪朝日新聞京都付録』より）

表-1 奈良鉄道各駅における小包郵便取扱量
（『明治卅二年度京都郵便電信局統計』より）

	差出		到着	
	上り（個）	下り（個）	上り（個）	下り（個）
京都		4,645,725	1,342,621	
伏見	2,165,124	148,217	269,106	1,949,753
宇治	2,369,040	118,800	43,800	798,600
長池	101,294	15,520	11,885	195,800
井手	149,108	10,438	12,320	205,505
木津	449,350	113,400	1,006,970	1,416,620

多くなっている（表-1）。

鉄道を利用した小包郵便による通信販売は、宇治茶の商圏を飛躍的に拡大し、同時に宇治茶に支えられた宇治の都市イメージの拡大にも貢献したと言える。

4. 電気事業による都市イメージの近代化

近代期に人々の都市生活に最も大きなインパクトを与えたと考えられる電気事業が、近世以来宇治の都市イメージを形成してきた名所と茶に与えた影響を分析した。

（1）宇治における電気事業の展開

宇治には、1913年（大正2）に送電を開始した宇治川電気（現関西電力）と宇治町営電気の2つの電気事業が存在した。

宇治川電気は、巨額の費用を投じて宇治川の豊富な水量を利用した宇治発電所（1,600万円）、志津川発電所（1,650万円）を建設し、次々と周辺の電力会社を合併し京都・大阪などの大都市を中心に広範囲に送電した。

宇治町営電気は、宇治川電気に遅れること3ヶ月、町営の火力発電所を建設する予定を変更し、宇治川発電から買電して宇治町内に電気を供給する事業に徹した。宇治における発電所建設による風致破壊に対する補償としての意味合いも強かったと推測される。町営電気事業は、町の財源を大いに潤した。

（2）名所の近代化

宇治川の豊富な水と鉄道による輸送力に加え、電力が容易に得られるようになったことにより、宇治は工場の

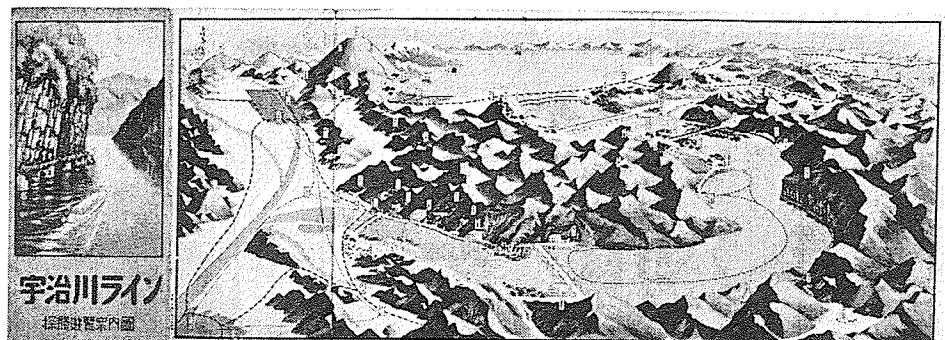


図-9 宇治川ライン（『宇治川ライン探勝遊覧案内図』より）

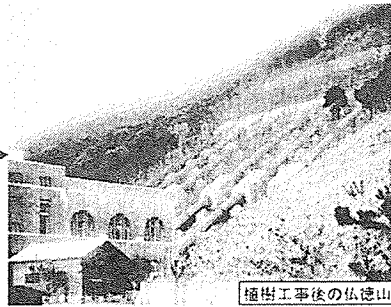


図-10 植樹工事による仏徳山の風致維持
(『宇治川電気』第一期工事竣工記念写真帖』より)

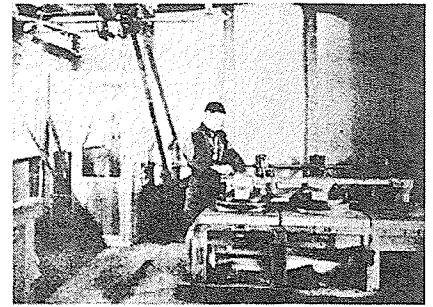


図-11 半機械製茶の導入
(『目で見える 南山城の100年』より)

立地に適した場所となった。このような工場や発電所により、それまでの名所と茶で代表されていた宇治の都市イメージに、工業都市の色合いも付加された(図-8)。

宇治においては、宇治川を中心とする山河の美が近世以来の名所遊覧の主軸ではあったが、電気事業により飛躍的に向上したエネルギー供給は、平等院のライトアップやダム湖に就航した宇治川ライン(図-9)など、電力や発電施設を利用した新名所を次々と創出していった。宇治における名所遊覧は、宇治川周辺の風光や寺社を中心としたものから、企画されたイベントに参加するものへと徐々に変化していった。

このように電力は工業や新名所を生み出したが、発電所建設は森を伐り山を削る文字通り破壊であった。これに対し宇治では、貯水池築造や鉄管敷設工事により破壊された仏徳山に植樹工事を行った(図-10)。また、送電線を地下化や鉄塔を暗緑色に塗色し、工場も宇治橋より下流の風景地帯には入らない敷地に建設するなど、宇治の都市イメージを支えてきた山河の美の破壊を最小限に食い止める努力がなされた。

(3) 宇治茶の継承

近世以前からの手揉みによる製茶は、重労働にもかかわらず生産量は限られていた。機械製茶の品質は手揉みには到底及ばないものであったが、戦争による経済的影響は機械化を促進した。電力を利用した製茶機械が導入されたが、近世以来優良品至上主義をモットーとしてきた宇治では、茶の品質を守るために「半機械製」の製法が採用されるに留まった(図-11)。

「半機械製」の導入や茶業記念祭の挙行によって、宇治の都市イメージを支えた宇治茶の品質は守られ、後世に受け継がれたと言える。

5. 結論

近代を代表するインフラストラクチャーである鉄道は、名所遊覧や茶業に影響を与えながらも、それらが支える都市イメージを継承した。そして、人々と近世宇治の都市イメージとを急速且つ強力に結びつける役目を果たし、近世宇治の都市イメージを空間的に押し広げたとと言える。

電気事業は、宇治の都市イメージに工業という新しい要素を付加し、名所遊覧や茶業においては新しい観光や製造法を生み出した。電気事業により、宇治の都市イメージは近世よりも拡張されたとと言える。しかし、近世宇治の都市イメージの基盤であった都市景観や都市文化を継承する努力も払われていた。

近代化過程における宇治では、鉄道・電気事業といったインフラストラクチャー整備が宇治の都市イメージを一新させたのではなく、インフラストラクチャーの力が巧みに活かされ、都市イメージの構成要素を近代に適合するように変型させ、近世に形成された宇治の都市イメージの継承に寄与した。これにより都市の個性が維持され、近代宇治は魅力を失うことなく近代化したと言える。

主要参考文献

- ・ 林家辰三郎、藤岡謙二郎：『宇治市史 1～4』、宇治市役所、1973. 1～1978. 2
- ・ 鉄道省：『日本鉄道史 中篇』、鉄道省、1921. 8
- ・ 京阪電気鉄道株式会社史料編纂委員会：『鉄路五十年』、京阪電気鉄道株式会社、1960. 12
- ・ 京阪電気鉄道株式会社：『京阪 70 年のあゆみ』、京阪電気鉄道株式会社、1980. 4
- ・ 宇治川電気株式会社：『第一期水力電気事業沿革志』、宇治川電気株式会社、1916. 10
- ・ 林安繁：『宇治電之回顧』、株式会社宇治電ビルディング、1942. 12
- ・ 関西地方電気事業百年史編纂委員会：『関西地方電気事業百年史』、関西地方電気事業百年史編纂委員会、1987. 10
- ・ 宇治市歴史資料館：『宇治名所図会-旅へのいざない-』、宇治市歴史資料館、1998. 10
- ・ 宇治市歴史資料館：『よみがえる鉄道黄金時代-宇治を走った汽車・電車-』、宇治市歴史資料館、2000. 9
- ・ 郵政省：『郵政百年史』、通信協会、1994. 3
- ・ 京都府茶業百年史編纂委員会：『京都府茶業百年史』、京都府茶業会議所、1994. 3
- ・ 増補京都叢書刊行会：『増補京都叢書』、1934
- ・ 京都市参事会：『京都名勝記』、五車楼書店、1903. 4
- ・ 京都市役所：『新撰京都名勝誌』、京都市役所、1915. 10
- ・ 鉄道省：『日本案内記 近畿篇上』、鉄道省、1932. 3
- ・ 野中凡童：『大京都誌』、東亜通信社、1932. 8
- ・ 京都府久世郡役所：『京都府久世郡写真帖』、京都府久世郡役所、1915. 12
- ・ 若原英式：『目で見える 南山城の100年』、郷土出版社、1995. 11